

浄蔵と秦一族、そして円仁

浄蔵と秦一族、そして円仁とは深く繋がっている。浄蔵は知る人ぞ知る、比叡山延暦寺の名僧というか傑物であるし、慈覚大師・円仁は言わずと知れた比叡山延暦寺発展の最大の功労者である。したがって、平安初期の比叡山延暦寺を代表する名僧と言えば、浄蔵と円仁と言ってもいいかと思うが、実は、秦一族も比叡山延暦寺と深い繋がりを持っていたのであり、浄蔵と秦一族、そして円仁とは深く繋がっているのである。ここではそのことをご説明したい。

1、浄蔵という人物について

浄蔵という人物については、次のホームページに詳しく書いたもので、是非、それをご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/jyouzou.pdf>

2、浄蔵と秦一族との深い繋がり

浄蔵と秦一族との深い繋がりについては、「中国伝来文化・三戸の思想」という私のホームページに少し書いた。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/sansisiou.pdf>

そのホームページの中から、浄蔵と秦一族との深い繋がりについて書いた部分を次に紹介するとしよう。

秦氏は、わが国の歴史上まことに重要な氏族で、蘇我氏が横暴を極めていた頃、政治家として天皇の側近から身を引いてから、その一族は芸能面や技術面で大活躍をする。

平安京は秦氏とともに整備されていったと言って決して過言ではないが、その秦氏の菩提寺が現在の八坂庚申堂である。浄蔵は秦氏に頼まれてその八坂庚申堂の住職になっていたのである。

平安時代の初め、この八坂の塔が西へ傾くということがあった。人々は凶事として恐れた。時の天皇は浄蔵を呼びつけ元通りにするのを命じた。

当時、浄蔵は八坂の塔のとなりの庚申堂に住んでいた。

この時代の僧侶は結婚は許されていなかったが、天皇がその法力が絶えるのをおそれ、浄蔵に対して結婚させて二男をもうけたということだ。64歳になっていた浄蔵は自分の法力をしばらく使っていなかったために、二人の子供を膝に乗せ、手始めとして鴨川の水を祈祷によって逆流させたとある。そして自分の法力が衰えていないことを知ると、八坂の塔に向かって祈りはじめた。天空にわかにくもり、一陣の風が吹いたかと思うと塔はゆらゆらと揺れ、元の形におさまったという。なんと不思議な話であるが、事實は、秦氏の技術陣が修築にあたる際に、その完成を祈って浄蔵が天台密教独特の儀式を行ったということではなかろうか。浄蔵の祈りと秦氏の建設技術がそれを可能にしたということであろう。まあいふなれば二人の合作である。

以上のように、現在の「八坂の庚申堂」は、江戸時代に日本三代庚申堂の一つと言われてきたが、これはもともと秦氏の菩提寺であったものである。平安時代に浄蔵がその住職になってから朝廷の支援も得ながら庚申堂としての形を整えてきたものであろう。現在は、八坂にあるということもあって、祇園花街の人たちの信仰も厚く、また「八坂の塔」のすぐ脇にあることから八坂の観光名所にもなっている。

3、政治家としての秦氏

私の論文「邪馬台国と古代史の最新」第6章「応神天皇と秦氏」に秦氏が政治家として大活躍したことを詳しく説明した私のホームページにに次のものがある。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yamatai06.pdf>

その骨子は次の通りである。

井上光貞は確実に実在が確かめられる最初の天皇としているが、私は、井上光貞説に賛成だ。宇佐神宮や秦氏との関係などから、史実だと思われるものが多いからだ。また、私は、上述のように、物部氏のもともとの出身地を大野川の上流と考えており、物部氏は瀬戸内海を通じて邪馬台国の時代から豊後地方とは深く結びついていたと考えている。応神天皇の出身地を私は筑後川流域と見ているので、秦氏と物部氏が応神天皇を擁立したとしても何の不思議もない。私の考えでは、秦氏が既に邪馬台国の時代から大和に根を張っていた物部氏に働きかけて、応神天皇を擁立したのである。

4、秦河勝の子孫の政治を離れた活躍

秦氏は、新羅系の渡来人であるが、新羅系に限らず、さらには渡来系や在来の人たちに限らず、また鉱山や鍛冶に限らず、土木や養蚕や機織りの技術集団を束ねて全国の殖産に力を発揮した一族である。また、猿楽における本家・本流は、秦氏の血統・金春流である。猿楽にあつて金春禅竹（こんぼるぜんちく）は、猿楽の創始について『明宿集』のなかで、日本における猿楽の創始者は聖徳太子に仕えた秦河勝だったとし、河勝の末子が猿楽のを引き継ぎ、それが今日の金春流に連なっている、と書いている。

秦河勝の子孫は政治を離れて、地方の殖産や猿楽などで大活躍をするのだが、秦河勝は何故政治舞台から姿を消すのか、その点については、「邪馬台国と古代史の最新」第8章「歴史的直観力」に書いた。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yamatai08.pdf>

その中から、関係部分のみ抜き書きしておこう。

秦河勝のことについては、かつて私は、中沢新一に「精霊の王」にもとづいて「胞衣（えな）信仰」というタイトルで少し触れたことがある。秦氏に関連する部分を再掲しておくと、中沢新一は、次のように言っている。すなわち、

『猿楽の徒の先祖である秦河勝は、壺の中に閉じ籠もったまま川上から流れ下ってきた異常児として、この世に出現した。この異常児はのちに猿楽を創出し、のこりなくその芸を一族の者に伝えたあとは、中が空洞になった「うつぼ船」に封印されて海中を漂ったはてに、播州は坂越（サコシ）の浜に漂着したのだった。その地で、はじめ秦河勝の霊体は「胞衣荒神」となって猛威をふるった。金春禅竹はそれこそが、秦河勝が宿神であり、荒神であり、胞衣であることの、まぎれもない証拠であると書いたのである。

ここで坂越と書かれている地名は、当地では「シャクシ」と発音されていた。もちろんこれはシャグジにちがいない。この地名が中部や関東の各地に、地名や神社の名前として残っているミシャグチの神と同じところから出ていることは、すでに柳田国男が『石神問答』の冒頭に指摘しているとおりで、「シャグジ」の音で表現されるなにかの霊威をもったものへの「野生の思考」が、かつてこの列島のきわめて広範囲にわたって、熱心におこなわれていたことの痕跡をしめしている。』・・・と。

何故、秦河勝は播州・坂越（サコシ）の浜に流れていったのか？ 何故か？ その疑問について、私は、ずっと気になっていたのだが、谷川健一は「四天王寺の鷹」の中でそのことの明確な説明をしている。まさに目から鱗が落ちる想いである。では、「四天王寺の鷹」の最大のハイライトと思われるその部分を以下に紹介しておきたい。彼は、次のように述べている。すなわち、

『秦河勝と聖徳太子との密接な関係は、太子没後、彼のおかれた社会的、政治的立場を危なくさせることにもなった。蘇我蝦夷（そがのえみし）・入鹿（いるか）は聖徳太子の

嫡子である山背大兄王（やましろのおおえのおう）と秦河勝の關係に警戒の目を向けていた。（中略）この頃、蘇我蝦夷・入鹿父子の横暴は目に余るものがあった。硬玉2年（643）には、蝦夷はひそかに紫冠を子の入鹿に授け、大臣に擬する不遜な振る舞いもみられた。その年、山背大兄王が入鹿によって殺されるのを河勝は目の当たりにしている。

（中略）そこで入鹿の迫害が及んでくることをひしと感じた河勝は身の危険を避けるために太秦をはなれ、ひそかに孤舟に身をゆだねて西播磨にのがれ、秦氏がつちかった土地に隠棲したと推測される伝承が伝えられている。世阿弥の「風姿花伝」に並びに世阿弥の娘婿の禅竹の「明宿集」にその記述が見られる。』・・・と。

世阿弥は秦一族である。私は、先ほど「秦氏は、新羅系の渡来人であるが、新羅系に限らず、さらには渡来系や在来の人たちに限らず、また鉱山や鍛冶に限らず、土木や養蚕や機織りの技術集団を束ねて全国の殖産に力を発揮した一族である。」と述べたが、秦氏の子孫に世阿弥が出ている。明宿集」に秦河勝の子孫に三流あり、一は武人、二は猿樂、三は天王寺の楽人とあるように、秦河勝を先祖と仰ぐ円満井座の猿樂者と天王寺の楽人との間には根強い結縁意識があったらしい。

秦一族は、特に東北地方の発展に大きな力を発揮していくが、このことを理解するには、物部氏のことをまず理解しておかねばならない。秦一族は、物部守屋が蘇我蝦夷と入鹿に殺されてしまったから、物部一族の統括していた技術者集団を引き継いでいくのである。

法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮魂するための寺であり、谷川健一の「四天王寺の鷹」で明らかにされているように、法隆寺は秦氏がその建設に携わった。そして、秦氏は、物部氏を引き継いで、諏訪の製鉄技術者集団を統括していた。これらの事を考えると、法隆寺と諏訪が深く結びついていたと考えても何の不思議もない。当然だろう。

5、秦氏と慈覚大師・円仁との繋がり

永承6年（1051年）、前九年の役に出陣する源頼義は園城寺の新羅明神に戦勝祈願をし、息子義光は「新羅三郎義光」と名乗ったほど「新羅明神」の信仰をが厚かった。秦氏本拠地香春の神は新羅神であった。秦氏は新羅経由の渡来人であったので、もともと秦氏の信仰した神は新羅神であったのである。八幡神と秦氏との関係が表面化してくるのは応神天皇に秦氏が仕え始めてからである。源氏が八幡神を信仰するのは、源氏が秦一族であるということだが、新羅三郎義光は、八幡神を信仰するとともに、秦氏の本来の神・新羅明神を信仰するのである。なお、新羅三郎義光については、次を参照して欲しい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/sinra.html>

なお、園城寺は、比叡山延暦寺の寺門派の総本山であるが、そもそも最澄が新羅系であ

り、慈覚大師・円仁も新羅との関係が深い。赤山大明神のことについては、次を参照して欲しい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/heian1.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/heian2.html>

なお、京都太秦の広隆寺は秦河勝創建の寺であるが、ここの奇祭「牛祭り」は新羅系の祭りであり、新羅との関係の深い慈覚大師円仁の始めた祭りである。

広隆寺の「牛祭り」については、次のご覧いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/usimatur.html>